

北九州地区研究大会報告

北九州地区研究部

大会主題 「豊かな未来を創り出す子どもを育てる
小学校教育を推進する学校経営」

1 期日及び会場 平成30年6月22日（金） 直方いこいの村

2 日程

◇ 研修会1（総会） 14:30～15:20

(1) 開会の言葉

(2) 会長挨拶 北九州地区小学校長会 会長 松尾 正直

(3) 議長選出

(4) 議事

- 平成29年度事業報告
- 平成29年度決算報告
- 平成29年度会計監査報告
- 平成30年度役員紹介
- 平成30年度事業計画案
- 平成30年度予算案

(5) 議長解任

(6) 退職者紹介

(7) 退職校長挨拶

(8) 各地区会員紹介

(9) 閉会の言葉



◇ 研修会2（講演会） 15:30～17:00

(1) 開会の言葉

(2) 会長挨拶 北九州地区校長会 会長 松尾 正直
福岡県教育庁北九州教育事務所 所長 山本 栄司 様
直方市教育委員会 教育長 田岡 洋一 様

(3) 来賓紹介

(4) 講演

演題 「新学習指導要領移行期における校長のリーダーシップ」
講師 福岡教育大学教職大学院 教授 脇田 哲郎 様

(5) 謝辞

(6) 閉会の言葉

3 講演

演 題 「新学習指導要領移行期における校長のリーダーシップ」
講 師 福岡教育大学教職大学院 教授 脇田 哲郎 様

(1) 今回の改訂の大きな特徴

「社会に開かれた教育課程」・・・地域の人が分かる言葉で説明する必要がある
この理念の下、実際の社会で活用できる力として「育成を目指す資質・能力」を三つの柱で示したこと。

○知識・理解「何を理解しているのか、何ができるのか」

→ 大きな割合を占めていた、知識・技能の習得と習熟から、思考・判断・表現を通じて習得したり、その過程で活用したりする知識・技能へ

○思考力・判断力・表現力等「理解していること・できることをどう使うか」

→ 「覚える学力」から考えることや判断すること、表現することを育成する

○学びに向かう力・人間性等「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」

→ 「何を理解しているか、何ができるか」「理解していること・できることをどう使うか」の資質・能力を、どのような方向性で働かせていくかを決定づける重要な要素

一人一人の教師が、子どもたちの資質・能力を高め、これからの時代に求められる学習内容や活動の在り方をしっかり理解して授業の改善に努め、学習の充実を図っていくことが重要。

(2) 新しい学習指導要領が目指す子どもの姿

「予測困難な時代に、よりよい社会と幸福な人生の創り手となるような」子どもの姿を目指し

・ 2030年頃の世界の予測

「2011年にアメリカの小学校に入学した子どもたちの65%は、大学卒業後、今は存在していない職業に就く」キャシー・デビッドソン（ニューヨーク市立大学大学院センター教授）

・ 中教審答申に示された「学校教育を通じて子どもたちに育てたい姿」

教育基本法及び学校教育法その他の法令並びにこの章以下に示すところに従い、児童（生徒）の人間として調和のとれた育成を目指し、児童（生徒）の心身の発達の段階や特性及び学校や地域の実態を十分考慮して、適切な教育課程を編成するものとし、これらに掲げる目標を達成するよう教育を行うものとする。 ～新学習指導要領総

ている

そのために各学校では

(3) 社会に開かれた教育課程とカリキュラムマネジメント

○ 目標を社会と共有するとは

これからの時代は、手に入れた知識を活用し、出会ったこともない問題状況を自分たちの力で解決したり、様々な考えの人と新しいアイデアを生み出したりする人材が必要になって

くる。そうした人材こそが、未来の社会を確かに担っていく。そのためにもどのような社会を創造していく必要があるのか。そのためにはどのような教育課程が求められるのかが共有される必要がある。

○ 資質・能力を明確化するとは

描いた社会を創造していく人材には、どのような資質・能力が必要なかを明らかにしていかなければならない。今回の改訂では、「何ができるようになるか」とする実際の社会で活用できる能力の育成を大切にすることを検討した。その中で、資質・能力の明確化とともに、資質・能力を育成するには、実際の社会とのつながりなくしてはできないことも明らかになった。

○ 社会と共有・連携しながら実施するとは

求められる資質・能力の育成に向けて教育課程を編成しても、実現することは難しい。そのためにも学校と社会が一体となって子どもの育成に向かっていくことが大切。地域のもの人材等の教育資源を活用して、子どもを真ん中にする教育活動を行うことが大切。

○ カリキュラムマネジメント

- ・ 学校教育目標を踏まえた教科等横断的な視点で、目標達成に必要な教育内容を組織的に配列
- ・ 教育課程の編成、実施、評価、改善の一連のPDCAサイクルを確立

管理職のみならず全ての教職員が「カリキュラムマネジメント」の必要性を理解し、日々の授業等についても、教育課程全体の中での位置付けを意識しながら取り組む必要がある。

- ・ 教育内容と必要な人的・物的資源等を効果的に組み合わせる
- ・ カリキュラムマネジメントは、学校の特色を創り上げていく営みである
キーワードは、「みんなで」

(4) 変化の激しい時代に対応するための授業の改善

・ 一方的に知識を教え込む
「チョーク・アンド・トーク」の授業
・ 一人一人が受け身の授業

「主体的・対話的で深い学び」
への転換



○ 「主体的な学び」

子ども自身が興味を持って積極的に取り組むとともに、学習活動を自ら振り返り意味付けたり、身に付いた資質・能力を自覚したり、共有したりすることが重要。

○ 「対話的な学び」

身に付けた知識や技能を定着させるとともに、物事の多面的で深い理解に至るためには、多様な表現を通じて、教職員と子どもや、子ども同士が対話し、それによって思考を広げ深めていくことが求められる。

○ 「深い学び」

各教科等の学びの過程の中で、身に付けた資質・能力の三つの柱を活用・発揮しながら物事

を捉え思考することを通じて、資質・能力がさらに伸ばされたり、新たな資質・能力が育まれ
たりしていくことが重要である。教員はの中で、教える場面と、子どもたちに思考・判断・
表現させる場면을効果的に設計し関連させながら指導していくことが求められる。

(5) 「荒れた」学校の立て直し

保護者や地域の方々の支えが不可欠だった

○ 重点目標の設定→「かかわりを深める教育活動の充実」

- ・ 子ども相互のかかわりを深める教育活動→「学級活動(1)の充実」「縦割り活動の充実」
- ・ 地域の人、もの、ことにかかわる教育活動→「学校行事」

○ 子どもたちの変容（3年間で）

- ・ 「学校生活は楽しいですか」

とても楽しい	29%→41%	楽しい	29%→44%
あまり楽しくない	26%→9%	楽しくない	16%→6%

- ・ 「自分には良いところがありますか」

ある	13%→16%	どちらかといえばある	20%→53%
あまりない	50%→28%	ない	17%→3%

(6) 校長の仕事とは

○ 子どもを育てること <凡事徹底>

- ・ 教室の片付け
- ・ 下足箱の片付け
- ・ 授業中の集中
- ※ 荒れた学級があることが許されない
- ※ できるまで見届ける・できたらほめる

○ 職員を育てること <信頼して任せる>



※ 職員を大切にしない校長は、自分のことだけしか考えていない

- ・ 私が責任を取る
- ・ 学校は誰のものか（子どもたちのもの）
- ・ 全員A評価

子どもが本気になって話し合うとは（ある中学校）

- ・ クラス対抗の大縄跳び
- ・ 記録か？ 全員参加か？ どうしてもタイミングよく跳べない生徒の存在
- ・ 「ぼくは応援に回る」
- ・ 「それでいいのか」 ← クラスメイトからの提起により、本音を出し合い真剣に話し合う生徒たち
- ・ 考え、工夫し、ともに跳べた喜びを分かち合う生徒たちの姿

「教育は、感動的な仕事」

「職員とともに分かち合おう」